

本号のテーマ：「一斉授業の限界と学習補償」

昨年 of 全国一斉休校からちょうど1年が経ちました。

きっと誰もが新型コロナウイルスの脅威と感染拡大防止に翻弄された1年だったと思います。

長い休校で今まで経験したことのない状況のなか、学校では例年行ってきた行事が軒並み中止や縮小になりました。子どもたち、先生、保護者みんなが残念な思いをたくさんしてきました。

私が「教育委員とは何ぞや？」から始まった任期のなかで、早2年が経とうとしています。保護者という立場で16年ほど学校教育を見てきたつもりですが、立場を変えてみるとこんなに知らなかったことがたくさんあったのかと驚くばかりです。コロナ禍では特に、教育委員会と校長先生や教頭先生との情報の共有や確認の場が多くありました。学校教育のなかで子どもたちのことを真剣に考え、知恵を出し合い対策を進めていく経験は、とても大きなものでした。と同時に、こんなにもたくさんの方が子どもたちのために動いてくださっていることを知り、一保護者として大変嬉しく思いました。

“手段が目的化”しないために
～「何のためにそうするのか」～

先日、今年度最後の市教委主催の教頭会がありました。

国のGIGAスクール構想を受けて、子ども1人に1台パソコンの整備が3月中に終了します。4月からいよいよICT教育に本腰が入ってきます。



会議の中では教頭先生からの質問や意見も出て、「手段が目的化しないために」という話がありました。「何のためにこれをやるのか？」を考えて単にパソコンを使うことが目的にならないようにするということでした。パソコンを活用して、どんな授業ができるか？今課題となっている学力格差や不登校問題、特性への対応などに、どのように役立てていけるでしょうか。

新しいことへの取り組みは、教育現場が混乱してしまうリスクもありますが、抱えている問題を解決する「チャンス」でもあります。私たちはこのコロナ禍で「ピンチをチャンスに！」を学んできました。きっと、先生方の知恵とスキルを共有して循環を起こせば、このGIGAスクール構想は大きな転換期となり、学校教育を一段と良い方向へ導いていくことができるのではないかと期待しています。

先生は「当たり外れ」？ 安定した学習補償を

私たち保護者のなかで時折話題になるのは、「合う先生と合わない先生」です。

子どもにはそれぞれタイプがあります。記憶のしかたや捉え方、得意なこと、嬉しい言葉やヤル気になる言葉。先生にも教え方や気配りのし方、丁寧さ、経験値も違いがあります。全員の子ともと相性の良い先生はいませんが、大切な1年間、場合によっては何年も、先生とうまく人間関係が築けないまま、十分な学習ができないというようなことはあってはいけません。



大切なのは、子ども（相手）のことをよく知ることです。知ることによって合わない、うまくいかないことは補完できます。

保護者は、我が子が学校生活のなかで意欲的に学習や教育活動に取り組める環境を望んでいます。先生の得意とするところによって授業も様々です。音楽が好きな先生、歴史が得意な先生、

ITに長けた先生、個性ある先生が子どもたちにたくさんの刺激を与えてくれることはとても望ましい環境です。

では、そのなかで「わかる授業」をまんべんなく子どもたちに与えるにはどうしたらいいでしょう。

「学力不振」は子どもたちの大きな悩みの1つです。真面目に学校で授業を受けていても、成績が悪く悩んだり、評価されなくて自信がなくなり学校に行くことがイヤになってしまう子もいます。

たとえば、同じ単元の授業でも視覚・聴覚・文字・イメージなどいろんな角度からしくんでみたり、先生の個性を前面に出し大学のように選べる授業にするなど、今までの「こうでないといけない」という固定概念を捨てて、子どもたちの学習意欲が掻き立てられ向上していく授業をどんどん展開してほしいと思います。

何のために学校に行き、何のために勉強するのか。

様々な教育活動を通して「生きる力」を身につけ、「人格形成」を行うことができるならば、中間教室でもフリースクールでも放課後学校でも・・・その子どもにとってのベストな場所であればいいのです。「通常学級に通うことがベストな環境である」という前提だけに立って支援をするのではなく、子どもがベストだと思う場所と方法で、学習や教育活動ができる、またしっかりと学習の補完が得られる体制にしていくことが大切だと思います。



一斉授業の限界

「認知特性に合った勉強方法」

人には学習(記憶)するとき、頭に入りやすい方法にそれぞれ違いがあるそうです。

◆視覚優位者：見た情報を処理するのが得意な人

(1)写真のように二次元で思考するタイプ

(2) 空間や時間軸を使って三次元で考えるタイプ

◆言語優位者：読んだ情報を処理するのが得意な人

(3) 文字や文章を映像化してから思考するタイプ

(4) 文字や文章を図式化してから思考するタイプ

◆聴覚優位者：聞いた情報を処理するのが得意な人

(5) 文字や文章を、耳から入れる音として情報処理するタイプ

(6) 音色や音階といった、音楽的イメージを脳に入力するタイプ

※ハッキリと「このタイプ」と線引きできるものではありません。バランスよく使っている人もいれば、一つの特性に特化している人もいます。

(参考：ダ・ヴィンチニュース | あなたに最適な記憶法も分かる！？自分の「認知特性」を調べてみよう)

漢字や単語を覚えるとき、娘は口で発音しながら頭でイメージして空書きする（手元を見ないで裏紙に書きなぐる）と覚えられるそうです。自分の発音を「聞いて」頭でイメージして記憶するタイプなので「聴覚優位」、英単語を見ても書いても覚えられない息子は、CM や歌を数回聞くとすぐ覚えてしまいます。【もしもしカメよ】の歌に疑問詞（What, Who, When, Where, Why, Which, Whose, How）を乗せて歌ったらスラリと覚え、時間が経っても忘れません。まさに聴覚優位の音色音階型だと思われます。

結局、自分で模索するので長い年数がかかり、娘は高校卒業するときにやっと自分に合った記憶方法が見つかったと言っていましたので、世の中に出回っている自分の特性を知るツールなどを活用するのも良し、先生がいろんな方法で授業してみても試してみるのも良し、早い段階で「自分に合った記憶のメカニズム」を知る機会を作るのもいいのではないかと思います。

受信型から発信型へ

アウトプット重視 ミニ先生「学び合い」

今、学校教育は過渡期です。文科省が導入する新学習指導要領の教育課程(カリキュラム)の基準が改訂され、「社会の変化に対応し、生き抜くために必要な資質・能力を備えた子どもたちを育む」とあります。要は、子どもたちが自ら考える力をもって「生きる力」を育

みましよう！という内容なのですが、具体的に授業がどう変わっていくのか、親の私としてはとても関心があります。

学習の理解度を深めるために「アウトプット」はとても大切です。受信して発信、その繰り返しで理解度は深まっています。先生の説明ではよく理解できなくても、お友だちの言葉やイメージで理解できた、お友だちに教えているうちに実は理解していないところがわかった、ということはよくあります。「学び合い（ミニ先生）」を取り入れている学校はたくさんありますので、市内全体で共有して、学習効果を図ってほしいと思います。



変化する社会に合った学校教育を

今までの学校教育は、基礎的な知識を習得することにほとんどの時間を費やしていたのでは、と感じています。特に中学から高校にかけては、定期考査をはじめ、高校受験や大学受験、いかに5教科(国英数社理)の学力が高いか、で評価が決まってくることが多いように思います。点数や学年順位の高い子が評価され、偏差値の高い大学に進学します。その結果、大学を卒業する就活(就職活動)の場面になって、「あなたの得意なこと、他人より優れていることを教えてください」という面接官の言葉に戸惑う学生も多いのではないのでしょうか。

中学から「平均点～それ以上」の点数を取ることが何よりも「良し」とされてきた嫌いはなかったでしょうか。「得意なこと」「秀でてること」にフォーカスされることより、「できていないこと」「平均点以下のもの」を如何に減らしていくか、そこに注力することが最優先の学校教育であったとすれば軌道修正が必要だと思えます。

社会はどうでしょう。どんな人が求められているのでしょうか。

2011年の「企業が求める人材」では、「チームワークを尊重できる人」や「社風になじむことができる人」が上位でしたが、2020年には「自分で考えて行動できる人」「リーダーシップを持ち、人を引っ張っていける人」「部下や後継者の指導や育成ができる人」など、指示されたことをやるだけではなく、自ら考えてアグレッシブに会社に貢献できる人が求められているのです。

学校教育が評価してきたものと、社会に出て求められるものとのギャップがあるとすれば、これに多くの若者が悩みます。

なんとなくやらされてきた勉強ではなく「主体的に学ぶ」授業の工夫、「友達とは仲良くね」と争うことを避けるのではなく、どうやったら問題解決するかを子どもたち自身が考える力をつけることが今後ますます学校教育に求められてきます。

学校教育と家庭教育

サポートし合える関係に

私たち親に関しては、公の学校教育に依存しすぎているケースもあります。学校に行っていれば勉強がわかるようになる、給食を食べていけば家で食事のことは考えなくていい、そんなことはありません。親である私たちは「養育する義務」と共に、学校教育を受けるためのより良い環境を作る最大限の努力をしなければいけません。私は自分がいなくなった後もこの世で生きていく我が子に、必要な力をつけて大人になってもらいたいと願っています。

家庭と学校が一人の子どもを中心にサポートし合える良い関係を築いていくことがとても大切なことで、これからもそういう関係づくりに努めていきたいと思えます。